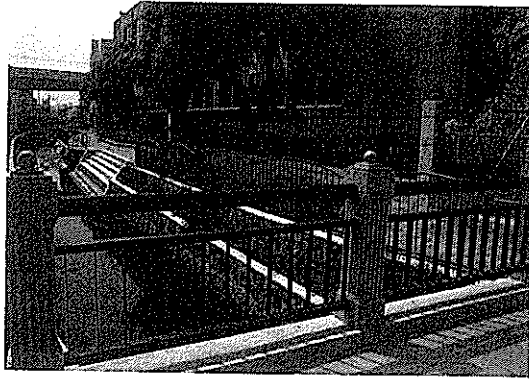


委員からの情報提供

大阪府立大学大学院農学生命科学研究科教授

荻野 芳彦 委員

「大和川の付け替えの歴史」



長瀬川の親水空間

今、大阪では長瀬川の環境と河川生態系の復元を目指している。

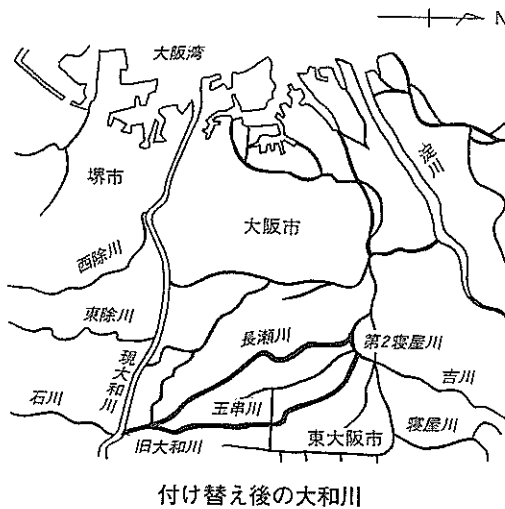
◆大阪府 大和川付け替え事業の功労者、 中甚兵衛

●大和川付け替え後二〇〇年

中甚兵衛は、一六三九(寛永十六)年、河内国河内郡今米村(現・東大阪市今米)の生まれである。明治の廃藩置県のときまで中家は、今米村の庄屋を務めた家柄である。この項

の共同執筆者の一人中好幸は甚兵衛から教えて一〇代目にあたり、代々中家に伝わる骨董を整理し、膨大な資料を解読し、中甚兵衛と大和川付け替えの史実を明らかにしている。

大和川は建設省一級河川であり、奈良県大和野の河川を集めて中央を西流し、狭窄部亀の瀬を経て河内平野に入る。そのまま西流し、大阪市と堺市の境界をなして堺港の北で大阪湾に



付け替え後の大和川

落ちる。これは現在の大和川の流路であるが、もともとは河内平野に入るとすぐに北流し、いくつかの派川に分かれて河内平野を北に分流し、深野池、新開池を経て寝屋川を合わせて淀川から大阪湾に落ちていた。

さて、中甚兵衛は一七三〇(享保十五)年に九二歳で生涯を終えるまで、一生を大和川の付け替えとともに生きてきた土木功労者である。

大和川の旧河川敷は現在、「長瀬川」「玉串川」と呼ばれて、農業用排水路として築留土地改良区の管理する土地改良施設である。長瀬川は一九九三(平成五)年から大阪府営事業として改修事業が進められ、大阪府は東大阪市、八尾市、柏

原市と協力して景観・環境整備にも力を入れている。下流域の深野池、新開池と下流の湿原は、付け替え後、鴻池新田、中新田、川中新田などとして新田開発された。旧河川敷も五個井路、六郷井路として現存し、徳庵ポンプ場（用水取入れも兼ねている）で寝屋川に排除される。これらの施設は、東大阪市十六個土地改良区で維持管理されている。

戦後の急速な都市化の波に洗われて受益農地の八〇パーセント以上が住宅・工場用地などに転用された。長瀬川は生活雑排水などを流す下水路と農業用水を流す用水路に分離された。玉串川や五個井路、六郷井路も長瀬川と同様に汚水が流入し、雑然とした都市の中にかえりみられず、無惨な姿をさらしている。大和川も奈良県大和平野の急速な都市化により、生活雑排水などによる汚濁が進み、建設省の水質汚濁全国ワースト・ワンの汚名を毎年いただいている。

この事態に、建設省や大阪府、地元自治体も手をこまねいているわけではなく、水質改善、景観・環境整備に取り組み、一方で地元の団体・住民も積極的に環境改善に取り組んでいる。二〇〇四年には大和川付け替え三〇〇年の記念の年を迎えることになり、歴史・文化的価値の再認識と身近な生活の環境改善の両面から、なんとかしなければという機運にある。

●大和川の流域と付け替えの時代背景

大和川の旧流路を下流から追ってみることにしよう。

淀川合流点には難波津が位置している。ここは、京都に上るには淀川の三〇石船で、大和に上るには大和川の柏原船でというように、ヒトやモノが行きかう交易の要衝であった。

ここから大和川の本流、久宝寺川（現在の長瀬川）をさかのぼると、途中で八尾浜という船着き場に着く。そこには「本町橋」という橋がかかり、生駒街道と高野街道の交差点にあたり、街道と川の交点ともなっている。現在、柳と桜が植えられ、常夜灯も残され、いかにもヒトやモノが集まる往古が偲ばれる風情が残されている。

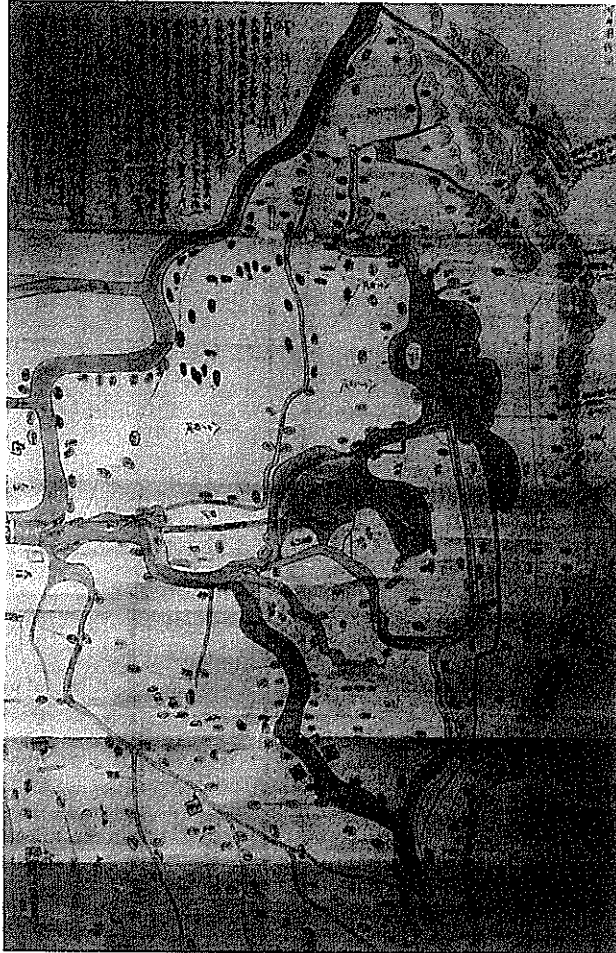
玉串川には昔のままの自然が残っていて、護岸が自然石で積まれている部分もあり、その護岸の一部に幅二〜三尺（六〇〜九〇センチメートル）くらいの船曳船頭が通った道らしき跡が残されている。ここからさらに上流を目指して、玉串川との合流点である二俣を経て、築留二番樋をくぐると大和川に出る。石川が南から合流する柏原を越えて、亀の瀬急流の難所をすぎると大和平野に出る。すぐに法隆寺で有名な斑鳩宮に着く。さらに東南に向かって平坦な水田地帯をゆるゆるとさかのぼると、飛鳥の藤原宮に到達する。

往古、道路の発達していないころ、ヒトやモノは船で運ばれ移動した。大和川は難波津と大和の国を結ぶ交易の幹線ルートであった。聖徳太子が派遣した遣隋使の小野妹子が隋に向かったときも、その答礼として隋からやってきた使者裴世清が飛鳥の宮に上ったときも、この世界的な大事件の舞台と

なったのが大和川であった。

裴世清は江口（今の東淀川）に着き、大和川をさかのぼり、海石榴市（今の三輪山の麓で金屋、飛鳥の外港となっていた）で迎えられた、となっている。晴れやかな船団は、この大和川ルートを通ったのではなからうか。長安の都と飛鳥の宮を結ぶ水上交通の幹線ルートではなかったか。だとすると、大和川・長瀬川は悠久の歴史を語る国際交流の原点でなければならぬ、と作家の高城修三は考えている。

歴史は下って一七〇四（宝永元）年、大和川付け替え工事



のため現在の築留の地点に最初の杭が打ち込まれた。北流する川を締め切り、西に向かって新川を掘削して堤防を築き、現在の大和川が完成した。この工事は着手するまで数十年の長い年月を要したが、工事そのものはわずか八か月で完成した。

五代將軍綱吉（一六八〇―一七〇九年）の治世で、元禄（一六八八―一七〇四年）から宝永（一七〇四―一七二一年）と年号が移り変わり、徳川幕藩体制の安定期にあり、元禄文化の華やかな時代である。同時代におこった出来事には、一

六五七年の明暦の大火、河村瑞賢の淀川改修、一七〇二年の赤穂浪士の討ち入り、一七〇五年の伊勢お陰参り、一七〇七年の富士山噴火（宝永山）、一七二〇年の江戸町火消いるは組創設などがあげられる。また、同時代を生きた人には、井原西鶴、松尾芭蕉、宮崎安貞、新井白石などがあげられ、京都・大坂を中心とする上方文化の華麗な高揚期であった。

「河内国絵図」(付け替え前)

一方、大坂は一六八八（元禄元）年、堂島に米穀取引所が開設され、中之島に蔵屋敷が建ち並び、天満の青物市、雑喉場の魚市とともに天下の台所と呼ばれ、活況を呈した。物資の流通も舟運が中心で、大坂城北にある天満を起点として淀川、大和川が内陸交通の動脈となっていた。上方の町人経済の繁栄とにぎわいを見ることができた時代であった。

●中甚兵衛の生い立ちと付け替え工事

中甚兵衛は、この時代に大和川の付け替えに文字どおり一生を捧げた人である。先に記したように、甚兵衛は一六三九（寛永十六）年、代々今米村の庄屋を務める家柄に出生した。河内郡今米村は玉串川の派川吉田川の左岸にあり、戸数三〇戸（二三ヘクタール）の大和川流域の下流湿原に近い葦・蘆の群生する低湿地にある。現在残っている中家の屋敷跡も石垣を積んで高くなっており、かつては湛水・浸水被害の常襲地域であったことがうかがえる。

甚兵衛は一八歳のとき父を亡くし、庄屋を継いだ。大和川付け替えの嘆願のため、一六五七（明暦三）年一九歳で初めて江戸に行き、そのまま一六年間（一六七二年まで）江戸に滞在した。一六七三（延宝元）年村に戻り、三五歳で結婚し、一男（九兵衛重豊、後に今米村庄屋を継ぎ、中新田、川中新田開発に尽力する）二女を設けた。以後、村に在住し、大和川付け替えに奔走した。

一七〇三（元禄十六）年、中甚兵衛六五歳のとき、幕府は大和川付け替えの工事認可をおろし、普請奉行に大久保甚兵衛忠香らを任命した。翌一七〇四年二月、幕府普請奉行大久保甚兵衛と伏見主水が大坂に着き、大坂代官萬年長十郎は普請役所を住吉郡喜連村に設置した。このとき中甚兵衛は公儀から普請御用役を拜命し、嫡子九兵衛、中新開村太郎兵衛ら



帯刀する中甚兵衛
(1725=享保10年)

四、五人が中甚兵衛を補佐することになった。

工事の主な進捗状況を示すと次のようである。

工事区間を公儀御普請所（五二町〓約五・七キロメートル、一町〓約一〇九メートル）と御手伝普請所（七九町〓約八・六キロメートル）に分けて、手伝普請役を播州姫路藩本多中務大輔に命じた。姫路藩は三七〇人の藩士を派遣した。

①二月十八日から、新川予定筋の中心線に大竹を一〇町ごとに吹き流しをつけて打ち込む。次いで一町ごとに竹杭を打ち込み、横断方向に五〇間（約九〇メートル）の川幅として杭を打ち込む。この杭内に入る潰れ地予定地の高反別帳を作成する。

②姫路藩主が死去し、新たに手伝普請役として、和泉国岸和田藩主岡部美濃守長泰、摂津国三田藩主九鬼大和守隆方、播磨国明石藩主松平左兵衛佐直常の三大名にそれぞれ二三町（約二・五キロメートル）ずつ担当することを命ずる。

新大和工事の分担と幕府筋の費用概算見積り (1704=宝永元年8月)

| | | 工事区間 | 長さ | 工事責任者 | 銀(貫目) | 金換算(両) | |
|---------|--------------|--|-------------------------|---|---------------------------|---------|--------|
| 大和川・落堀川 | 公儀普請場 | ① 船橋村領～川辺村領 | 52町 (3,120間) | 大久保甚兵衛忠香 (江戸大目付 1,200石) 伏見主水偽信 (江戸目付 1,500石) 萬年長十郎 (大坂・代官) | 776余 | 12,933余 | |
| | | ② 川辺村領～城連寺村領 | 23町 (1,380間) | 岡部美濃守 (泉州岸和田藩主 6万石) | 3,635.8余 | 60,596余 | |
| | ③ 城連寺村領～庭井村領 | 23町 (1,380間) | 九鬼大和守 (摂州三田藩主 3.6万石) | | | | |
| | ④ 庭井村領～浅香山谷口 | 23町 (1,380間) | 松平左兵衛佐 (播州明石藩主 6万石) | | | | |
| | 御手伝普請場 | ⑤ | 浅香山谷口～安立町 | 10町 (600間) | 本多中務大輔忠国 (摂州姫路藩主 15万石) | 106 | 1,766余 |
| | | | 浅香山谷凌 | | | 60 | 1,000 |
| | | 総堤芝伏 | | | 120 | 2,000 | |
| 計 | | 川上堀初～川下海辺 | 131町 (7,860間) | 植村右衛門佐 (和州高取藩主 2.5万石) 織田山城守 (丹波柏原藩主 2.3万石) | 4,697.8余 | 78,295余 | |
| 付帯工事 | | 狭山西除川切違 (大乗川切違) 城連寺村水除堤 十三間堀川延長 | | 52.8 | 880余 | | |
| 合計 | | | | 4,750.6余 | 79,175余 | | |

(注) 1町=60間=約109m。

- ③ 四月二十九日から、用水源を失う了意川(平野川)に新大和川への伏樋を通すことを陳情。これが認められ、同時に工事に着工し、青地・井出口樋組が結成される。同様にして、古大和川筋の用水源として築留に樋管を通して用水源とすることが認められ、一番樋(この年)、二番樋、三番樋(翌年)が完成する。
- その後、十間井路(二俣まで)、東水道(今の玉串川)、西水道(久宝寺川、今の長瀬川)を用水源とする築留樋組を結成する。東水道は岩田屋(畑中家)が、西水道は久宝寺家(高田家)が会所を建てて管理者となる。
- ④ 八月、工事促進のため、大和国高取藩主植村右衛門佐家敬と丹波国柏原藩主織田山城守信休の二大名が手伝普請役を命じられる。
- ⑤ 九月、大和川大橋が完成。
- ⑥ 十月十三日、新川切り通しが行なわれ、新大和川開削工事が竣工する。
- ⑦ 工事区間一三二町(約一四・三キロメートル)、付帯工事(狭山西除川切り違い、十三間堀川延長、城連寺村水除堤など)、潰れ地二七四町歩(約二七四ヘクタール、三七〇〇石)、入り用金七万一五〇三両(うち三万四〇〇〇両は手伝い大名五名の負担、残り三万七〇〇〇両は大坂城御金蔵から出資、のちに開発地代金で返納)。
- ⑧ 十月二十五日、普請役所閉鎖。中甚兵衛らは普請御用を

免じられ、御礼のため江戸に下る。

⑨十一月、新田開発のため入札始まる。大坂町人衆ら、新田開発を願ひ出る。新田開発予定面積一〇二八町歩（一町歩Ⅱ約一ヘクタール）、開発願人の地代金落札合計三万七二二〇両が認められる。

⑩十一月、大久保甚兵衛、伏見主水ら、江戸に帰る。十一月十五日、大久保甚兵衛が大坂町奉行に就任。

中甚兵衛は工事完了の後すぐ、一七〇五年に浄土真宗大坂津村御坊で剃髮し、法名乗久を受け、その後は乗久と称したが、一七三〇（享保十五）年に九二歳で天寿をまっとうした。

●付け替え事業への取組み

この大事業の前史ともいべき付け替えの発案と運動の端緒、大規模河川改修事業の実績と土木工事技術、水災害の激化などのバック・グラウンドと、付け替え事業の促進派と反対派の対立、幕府と大坂町奉行・堤奉行の対応などについて見てみよう。

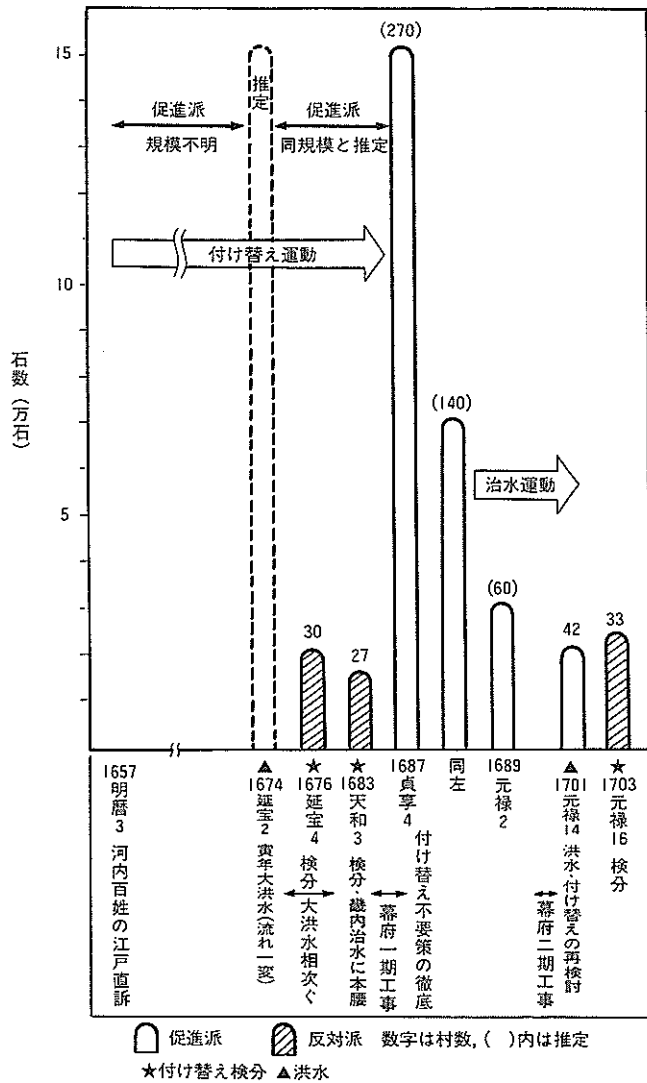
豊臣秀吉が大坂城を築き、その後、徳川の時代に入って、大坂・河内平野は急速な経済成長をとげた。前述のように、徳川時代初期は政治・経済が安定し、上方文化が栄え、町人経済のピークを迎えた。経済発展は人口の集中、都市化を促し、大和川の洪水対策・内水排除問題が地域発展の最大のネックとなってきた。

同時に、角倉了以の大堰川、富士川の開削、河村瑞賢の畿内の治水工事、片桐且元の狭山池大改修事業などの農業土木・河川治水技術の進歩と幕府・藩経済の発展があり、大都市の人口増は、地域開発の可能性をさらにのばしたといつてよい。

河川開発とともに新田開発は分家・分村を生み出し、河内平野でも開発が進むにつれて生産高が上昇すると同時に、洪水被害の頻度も増加して被害人口も増加し、より大規模な治水事業への要求が高まってくるのは当然のことであった。

わが国の農業土木（一部河川治水）事業は、規模の大小を問わず、農民の請願・嘆願を幕府や藩が聞きとけてやるというスタイルをとる。この様式は現代も、土地改良事業を農民の申請事業として実施することになって受け継がれている。いい換えると、わが国の農民が農業土木事業を通して、世界でもまれな高度に発達した水利組合を持ち、農民自らの手でそれらを守り、発展させていくという水利社会を形成してきたのである。

この付け替え事業でも、付け替えによって洪水を免れ、内水排除の利益を得る農民（村数にして二七〇）の江戸表への嘆願と、一方で新大和川の河川敷きとなるため立ちのきを強いられる農民（村数にして三三）の反対運動・直訴という、二つの利害が真つ向からぶつかり合った。この地域対抗関係と、幕府と大坂町奉行・堤奉行がそれぞれの言い分を検分し、



促進派・反対派農民運動の規模比較

●地域の今日の状況

一七〇〇(宝永七)年に始まった「築留樋組」は、明治に入って「築留普通水利組合」になり、一九五二(昭和二十七)年に土地改良法の制定によって「築留土地改良区」に組織変更された。下流の「拾六ヶ普通水利組合」も、同年には「東大阪市十六個土地改良区」となって現在に至っている。

一九五四(昭和二十九)年に、築留土

技術的可能性と経済評価をした後、実施の裁可が下された。幕府は最初は河村瑞賢の案を取り入れて、付け替えには反対の態度をとり、大和川下流の治水工事を行なったが、これらの事業は大洪水のたびに流され、これらの案が不十分であることがわかり、最終的に公儀御普請(今の国営事業)、国元御手伝普請(県営事業)などとして実施することになった。いうまでもなく、河内平野の旧大和川流域の農民は、工事促進の嘆願を繰り返して行なった。その中心となった人物が

中甚兵衛である。大洪水のたびに促進派が嘆願に出かけ、それを受けて幕府の現地検分が行なわれ、次に反対派の嘆願が出るということが、五〇年以上も繰り返された。具体的には、促進派は治水対策つまり新田開発による地域経済発展に有効であることを説いて回り、一方で反対派は大和川に利権を持つ舟運業界(柏原船、剣先船)、南北に走る紀州街道、高野街道が切断される不利益を説いて回った。そして、それぞれ味方を得ながら、自らの利益と不利益、つまり治水工事をめぐる直接的な利害関係・地域対抗関係を克服し、大きな社会・経済発展の枠組の中で、裁可が下されたのである。

地改良区の前の大和川堤防上に二五〇年記念碑と中甚兵衛の像が建立された。二〇〇四年には三〇〇年記念事業が計画され、この歴史的な偉業をたたえ、次世代に継承する祭典が催されることになっている。

長瀬川では、府営緊急防災事業によって溢水対策が強化され、同時に沿線の柏原市、八尾市、東大阪市は長瀬川の問題環境整備に取り組んでいる。

これを契機として、大阪府と三市、築留土地改良区が協力して「長瀬川いきいき水路府民フォーラム」を開催し、長瀬川の問題環境と河川生態系の復元を目指して、専門家と行政・改良区そして地域の住民が協力して環境改善の方策を検討している。はじめは行政・専門家が用意するという状況で始めら

れたが、しだいに地域住民の声が大きくなり、地域住民自らが企画・立案し、行動するというムードが生まれつつある。地域環境の改善活動にとって大切な地域住民の生活者の毎日の生活習慣の中で、環境改善の意志が働く仕組みが生まれてきた。

地域住民は環境にとけ込んだ農業用水の歴史や文化的な背景を知ることによって、環境改善に積極的に汗を流す意義と喜びを見つけ出すことができるのではなからうか。

(荻野芳彦、中九兵衛好幸)